

研究発表大会顛末記

第 27 回国際 P2M 学会春季研究発表大会結果報告

実行委員長 岡田久典
副実行委員長 永井祐二

はじめに

国際 P2M 学会では、毎年、春と秋の年 2 回、研究発表大会を開催しています。今回は、去る 5 月 18 日(土)に開催されました春季研究発表大会についてご報告致します。今大会は、学会史上でも最大級の発表数、参加者を数え、盛況のうちに終了いたしました。主催者各位、学会関係者、一般参加者の皆様に厚く御礼を申し上げます。



大隈記念講堂と創作者像



早稲田大学 3 号館 (政治経済学部)

大会テーマ:「P2M による社会問題解決(地域から国家, アジア, グローバルへ)」

開催日: 2019 年 5 月 18 日 (土)

会場: 早稲田大学早稲田キャンパス 3 号館

<大会趣旨>

P2M は経済・経営の各局面のみならず、地域課題から国家的な課題、アジア・グローバルな課題解決の基盤手法としてその重要性が様々な場所・地域で語られるようになった。Society5.0、SDGs (持続可能な開発目標) に代表される次世代への見通しをクリアにするためにも、実践に基づき個々のプロジェクトをプログラムを通じてマネジメントするための科学「P2M」学の適用範囲を飛躍的に拡大させることは、P2M に直接携わる者だけではなく、各分野のリーダー・イノベーターが参画すべき課題である。また、とりわけわが国もその一員であり、世界の最成長地域でもあるアジアにおける共通の言語として、「知行合一」に象徴される実践を学に昇華させる学としての P2M を確立させることもわれわれの重要なタスクである。

今回の大会は、記念すべき新元号スタートの時期に当たり、ますます深刻化する自然災害への対応・国土レジリエンスの強化、少子高齢化に起因する地域福祉問題など様々な問題などを含めた地域課題からわれわれの将来を規定する Society5.0、SDGs 等グローバルな課題まで、P2M をどのように適用していくのか、普及していくのか、産業界での取り組み、そして大学における P2M の存在感を大きく高める節目の年になると確信し、P2M が果たすべき役割を改めて認識する場としたい。

<研究発表>

研究発表は、A 会場～D 会場及び今回特設の W-Bridge 会場の計 5 トラックにおいて、計 36 題の研究発表があった。各トラックの

P2M マガジン No. 7, pp.13-17 (2019)

テーマは、A 会場「次世代 P2M」、B 会場「社会・地域・海外」、C 会場「人材育成、他」、D 会場は「リスク、他」、特設 W-Bridge 会場（早稲田大学と株式会社ブリヂストンが創設した地域民産学連携プロジェクト W-Bridge(<http://www.w-bridge.jp/>)を母体とした研究発表)と設定した。



W-Bridge 会場の様子（永井副実行委員長の研究発表）

各トラックの詳細は、学会のホームページ（<https://www.iap2m.org/pdf/2019spprogram.pdf>）をご参照頂きたいが、筆者（岡田）の自由な感想を述べさせていただくと、A 会場は「次世代」による発表ではなく、次世代を構想する当学会の重鎮の先生方の迫力ある発表で、これらのコンテンツを「P2M ビギナーズセミナー」と同じく、映像化、配信事業にぜひつなげることが出来ればと感じた。まさにこれからの大学生・社会人の必修科目は P2M ではないかとの意をますます強くした。

B 会場、C 会場、D 会場、W-Bridge 会場ともに盛況であったが、本大会は特に参加者が多くしかも、今回アカデミズムデビューだが、社会ではトップクラスのご活躍をされている方々が何人か参加されていた。これは「P2M ビギナーズセミナー」をはじめとする積極的な学会の努力によるもので、学会員の拡大、学会規模の拡大のためにも重要な一歩となると確信している。

なお、研究発表案件のうち各会場から 1 名ずつ発表奨励賞が選出され、表彰された。



D 会場<リスク、他>の様子

<総会>

学会総会は、13時より 801 号教室で開催され、定足数の確認後、所定の議事が進行した。



総会会場前

今回の総会では、特に本学会の創設からその発展に長年貢献された小原重信会長が退任されるため会長からご挨拶を頂いた。会員一同がまさに常に国際 P2M 学会に尽くされた先生に、今後の更なるご指導を願いながら、最大級の感謝の意を表したのは当然のことだといつてよいだろう。筆者（岡田）も新参者でありながら先生から常に暖かいご配慮を頂いたことを忘れない。先生お体を大切にされ、ますますのご活躍を祈念しております。



小原会長のご挨拶

小原会長が本大会後ご退任されることにもなって、新会長に山本秀男副会長(中央大学戦略経営研究科教授)が就任されることが報告され、早速ご挨拶を頂いた



山本新会長のご挨拶

重責を担われる山本先生のご挨拶は学会ホームページにも記載されているので詳細触れないが、学会の基本理念である「専門領域を超え英知を結集し、全体最適、全体調和を目指して社会ニーズに応えねばならない。」をますます発展させるために、「現代社会が取り組むべき課題に対する解決策を研究するため、学者、研究者、実務家の知恵を交換する「場」を提供していく。引き続き、みなさま方の学会活動への積極的な参加とご支援を賜りたい」と強調されたのが極めて印象的だった。筆者(岡田)も、微力ながら、小原先生から山本先生に引き継がれるこの路線実現のために寄与したいと考えている。

総会終了後、共催者・開催校を代表して、早稲田大学環境・エネルギー研究科長で環境総合研究センター長の勝田正文教授が、「我々は、4月中旬の日本経済新聞朝刊でも取り上げられたように、多様な視点の実務家の養成とこれらを生かした研究活動を進めており、これは、国際P2M学会の方向性と重なり合っており、今回の開催を期に是非連携を深めてまいりたい。」と挨拶を行った。

<シンポジウム>



中村明先生の講演

大会恒例のシンポジウム(講演とパネルディスカッション)は、100名前後の聴衆を得て、早稲田大学3号館801号教室で開催された。

基調講演1:「SDGsの現状とP2Mの活用」

講師:中村明氏(日本工業大学大学院技術経営研究科教授、(独)国際協力機構)

基調講演2:「イオンが取り組む持続可能な社会構築の事例」講師:山本百合子氏(公益財団法人イオン環境財団 事務局長、日本学術会議 連携会員)で、ともに現場の最前線に立つお二人の迫力ある講演に全員が聞き入った。

紙幅の関係で、詳細は割愛するが、先生の豊富なご経験を交えながら最後に、P2Mの機能として、①アウトカムの確実な実現、②プロセスを通じた継続的な知の蓄積と循環③技術システムの社会システム、サービスシステムへの転換④様々な知をつなぐ⑤技術を社会的ニーズにつなぐための知のプラットフォーム

といった点を提示され
たのが実に印象深かった。



山本百合子氏の講演

山本百合子氏は、今や世界を代表する巨大流通企業に成長した「イオングループ」を代表して、やわらかな口調ながら、企業理念とその実現の現場を丁寧にかつ迫力満点に語っていただいた。氏は、長年巨大グループの裏方として貢献されてきたこともあって、「学会のような場で報告できるのだろうか」と不安を口されていたが、実際は堂々たる講演となり、中村先生、山本氏ともに今回のテーマ「社会課題の解決」にふさわしい場を作り上げていただいた。

つづくパネルディスカッションは、「P2M による社会問題解決（地域課題から国家そしてアジア・グローバルへ）」と題して、講演者二人に、亀山秀雄氏（東京農工大学 名誉教授、(独)環境再生保全機構 プログラムオフィサー）、田中美保氏（(株)朝日新聞社 経済部記者）、松岡俊二氏（早稲田大学 アジア太平洋研究科 教授、早稲田大学レジリエンス研究所長、ふくしま未来創造リサーチセンター長）の3氏が加わり、活発な議論を繰り広げた。モデレーターは筆者（岡田）が務めた。



パネルディスカッション 右から山本氏、松岡氏、中村氏、田中氏、亀山氏、岡田

パネルディスカッションは、①社会課題の解決と P2M ②そのための人材育成 の大きな柱で進行し、田中氏、中村氏、山本氏の的確な現状把握と提言に応じて、国際 P2M 学会副会長の亀山先生から P2M 研究応用の展望が示された。非常に有意義なディスカッションとなったが、特に会場を沸かせたのは、被災地での研究と活動を続けておられる松岡教授からの「社会課題解決」の難しさとそのチャレンジに対する辛口のコメントで、予定調和に終始することも多い一般のパネルディスカッションに良い意味での緊張感を与えていただいた。他の登壇者各位からも、国際 P2M 学会に対する助言を含めて多くの示唆ある発言を頂いた。非常に内容の深い討論であったので、今後様々な場でその内容を活用し、「P2M 学」の発展に活用していただくことを期待する。



会場からの質問風景

シンポジウムで特に印象的だったのは、学会シンポジウムでは一般的に研究者の大御所からの発言が多いのが特徴だが、今回は、大学院生、学生からの質問が多かったことで、未来のための学問である「P2M学」の本領発揮となった。今回参加した若手研究者、大学院生、学生に今後のP2M学の中核としての活躍を期待したい。

終了後、来る10月6日(日)の第28回秋期大会の開催校である慶應義塾大学教授の中野冠実行委員長からご挨拶を頂いた。ご盛会を祈念しております。

最後に、過去の学会の基調講演者でもあり、早稲田大学元副総長で現在日本農業経営大学校長の堀口健治先生より、総括のお話を頂いた。お二人の先生はご多忙のところ、大会すべてにご参加いただいた。ありがとうございます。

<懇親会>

緊張感のある中で大いに盛り上がった、本大会であるが、懇親会も多くの方々にご参加いただけた。会場は、我々早稲田人では知らぬ者がいない、早稲田の百数十年余の歴史と

ともにある民間のレストラン「高田牧舎」を貸しきって行われた。



懇親会の一部様子

普段は、広く感じられる「高田牧舎」が熱気と多くの人々で山手線なみの混雑に感じられる中、数々のご挨拶、発表奨励賞の表彰など進行し、本大会のロジを支えていただいたスタッフ、学生の皆さんも参加して和気藹々、かつ未来に繋がる熱気あふれる議論が繰り広げられた。今回の大会は数多くの皆様方のご協力ご支援により無事終了することができた。本当にありがとうございました。

2019年7月15日受理